

ANIMATION

REVIEW

乙女たちのジュヴナイル

『大正野球娘。』  
J. C. STAFF

ゴトチヒ

『大正野球娘。』の内容を一言で言えば、「乙女たちのジュヴナイル」である。レビューの題名にしたぐらいだ。

読売新聞のテレビ欄「放送塔」（読者のテレビ視聴感想を載せるコーナー）でも、五十代の男性が見るに値するものという評価を与えている。

夏休みのウィークデーの帯として、集中放送とかしてもいいのではないかと思うぐらい正統ジュヴナイルだ。今までのジュヴナイルものの黄金パターンを堅実になぞっているのである。

もはや、ジュヴナイルは乙女たちを主人公にしなければ、成立しないのではないかと思える。ここ十年ぐらい前から、それは顕著になってきている。もしかしたら、「少年であった頃」という意味のジュヴナイルは、いずれ「乙女であった頃」になるのかもしれない。

逆に言えば、少年たちのジュヴナイルというのは、コンテンツの蓄積が多いから、いまさらそのジャンルを見せられても、こちらとしては「見る前から飽きている」。具体的にタイトルを挙げるまでもなく、名作ぞろいだし、それらを越える作品となると、作る側的に厳しいといわざるを得ない。だから、『バンブレ』のように、女の子たちが部活動をする話にして、彼女らが部活動を通じて成長するものになる。

そうすると、「成長を描けている」かが焦点となる。

結論から言わせてもらおうと、1クールで登場人物たちの成長をちゃんと描けたのはすごい。私の持論では、キャラクターの成長を見せるには、どうしても、2クールいる。大体二十六話前後のシリーズ構成で、まずキャラクターが未熟であるところを初期に見せ、次に練習や特訓でできなかったことができるようになるところを見せて、最終的に対戦相手から承認を得る一見のさせるが必勝パターンだろう。問題は2クールぐらいの幅がないと、キャラクターが成長したことを、見る側である受け手に実感させるのが難しい。

それを1クールで、実感できたのは、すごい。

いや、やろうと思えば、2時間サイズの映画でも、「成長を描く」ことはできることはできる。ただ、促成栽培のような印象を受けるのが、どうしても引かかる。有名な『エースをねらえ！』の映画版は2時間どころか、90分しかないのに、岡ひろみがお蝶婦人に勝ってしまうほど成長していることを、疑い無く観られる。それは出崎演出によるトリックがあるからだ。

アニメ『野球娘。』にはそれが無い。

それを端的に表現しているのは、一話を費やして描かれる合宿所でのエピソードである。ここでは、あらすじをあえて書かず、作中のある人物が言っているように、「早朝で行われる出来事」を素直に見てもらいたい。

観賞後に、私が言わんとしていたことが自然とわかると思う。

原作もさることながら、よく出来たアニメである。

《終》

備考・2009年11月25日に掲示板でアップしたものをリライト

蛇足・小梅が第一話の夢の中で歌う曲(「東京節」)は、『ブラタモリ』の「丸の内」の回でBGMとして使われた。歌詞の中に、丸の内に触れる一節があるのだ。

実は、その歌詞の一節を書いていたが、著作権法に微妙に抵触しそうなので、カットした。「丸の内は、どこか、もしかしたら東京辺りの、中心かもしれない」みたいな歌詞。

これは、ネタバレに近い話題なので、深く掘り下げないが「ある登場人物の体格が、当時の平均的体格であれば、結果が変わっていた」かもしれない。微妙に詳しくない記述にしているが、体格は個体差であるか、性差であるか、という問題にある。「これは個体差である」と見るのが現代ジェンダーだろう。

あまり、こういうことを言いたくないけれど、今のアニメ放送の問題点がある。本来なら夕方、東邦星華学院高等女学院女子野球部「櫻花會」のメンバーと同年代の子たちが見るべきアニメなのに――『野球娘。』は深夜放送である。

それは仕方ない部分もあるにはある。軽い「お百合表現」(吉屋信子的「S」なのか?)は、日曜夕方の放送(ことあるごとに「チュウ」するアニメ枠)には、ちょっとそぐわない。『マリア様が見ている』のスールのような表現だから、日が沈みきらないうちには、放送できない。その弁で言うと、昔、『ストップ! ひばりくん』と『パタリロ』をゴールデンタイムに放送していた時期があり、「日本の子どもたちにマチガった性嗜好に導きこうとした」時代があったことを考えると、あの程度の「お百合表現」はアリだと思うけれど……これは難しい。NHK-B.Sの夏や冬の休みにやるアニメ集中放送のときに何度も放送してほしい(『かみちゅ!』が放送できるのだから、ありえないことでもない)。

NHKの話題をしているのは、民放ではスポンサーの問題が出てくるからだ。

たとえば、『けいおん!』シリーズは、ここまで人気が出たら、編集版か何かをゴールデンタイムで放送すると、確実に裏番組より視聴率が取れる。だが、スポンサー側がゴールデンタイムクラスのスポンサー料を払えるか、というと、クライアントの顔ぶれを見ると……これは難しい。

大手のクライアントは安住アナが芸能人とロケする番組にしか、お金を払わない。これ以上すると、「乙女たちのジュヴナイル」というレビュータイトルなのに、「大人たちの金汚い話」になるので、話を戻すと、NHKではスポンサーの心配をしなくてもいい。逆に言えば野球用品メーカーなどのスポンサーがつけば、民放でも再放送できるはず。

再放送がされるようになれば、評価が高まる。そうなるといいのだが。

# ANIMATION REVIEW

このアニメの魅力を

『大五経経』  
J.C. STAFF

アニメ